

日本膜学会第37年会開催報告

第37年会組織委員長 齋藤博幸

日本膜学会第37年会は、季節外れの台風が関東を通過した後の5月14日（木）、15日（金）の両日、早稲田大学西早稲田キャンパス63号館にて開催されました。早稲田大学西早稲田キャンパスでの年会開催はこれで4年目となり、すっかり年会会場として定着してきた感があります。会場へのアクセスもよく、また両日とも晴天に恵まれ（日中の気温は30℃近くまで上昇しましたが）、280名を超える参加者数となりました。年会参加者数はここ数年増加傾向にあり、今回は大学・公的機関から約130名、企業から84名、学生72名の内訳で、企業研究者や学生の参加者が増えていることが覗えます。

37年会では、人工膜と生体膜の各特別講演に加え、シンポジウム4件（人工膜2件、生体膜1件、境界領域1件）、研究奨励賞受賞記念講演3件、一般口頭発表54件（人工膜22件、生体膜22件、境界領域10件）、ポスター発表74件（人工膜39件、生体膜20件、境界領域15件）と、非常に盛り沢山のプログラムとなりました。一般口頭発表やポスター発表では、人工膜、生体膜、境界領域の各領域の研究発表数がバランス良く集まり、いずれも充実した発表内容であったと思います。また、学生賞応募数も68件と昨年の年会から10件近く増え、1日目午後のポスター発表の会場では熱い（暑い？）ディスカッションが交わされていました。

今回の特別講演では、人工膜領域で東京工業大学の彌田智一先生から「液晶ブロックコポリマー薄膜のプレートプロセスとスマートメンブレン」、生体膜領域で前膜学会会長の半田哲郎先生から「リポタンパク質粒子ChylomicronsとDisk-HDLモデルの形成とその機能」というタイトルでご講演頂きました。両先生とも非常にレベルの高い内容をわかりやすくご講演頂き、私も大変勉強になりました。

特別講演終了後の懇親会ですが、前年まで懇親会会場として利用していた63号館1階のレストランが閉店したため、今回は生協カフェテリアでの開催となりました。会場の広さは十分でしたが、予想以上に懇親会参加者が多かったため料理が不足気味となり、皆様には大変ご不便をおかけしました。ただ、用意した徳島の地酒は好評だったようです。また、恒例の膜学会三賞の表彰では徳島ならではの賞品を用意させて頂きました。

年会2日目は、午前中から人工膜シンポジウム「膜による水処理技術を展望するVI」及び「無機膜が拓く新しいプロセス技術の展望III」、生体膜シンポジウム「細胞外ベシクル・エクソソーム研究の最前線」が3会場で行われました。シンポジウムに参加する当日登録者も多く、いずれの会場も大変盛況であったと思います。また午後は、境界領域シンポジウム「ガス封入・イオン選択的伝導性人工膜新技術を用いた生体膜機能形態形成制御メカニズム解明研究の新展開」の後、学生賞表彰式、総会、研究奨励賞受賞記念講演と続きました。すべての日程が終了したのは午後6時頃と大変密度の濃い充実した年会の二日間であったと思います。

末筆ながら、本年会の企画に多くのご助言を頂きました会長、副会長の先生方、企画から運営までいろいろとご協力頂きました副組織委員長の山口先生、会場の手配、設営、運営に大変お世話になりました松方先生はじめ研究室のスタッフ、学生、秘書の方々、初日の会場設営や受付等に朝早くからお手伝い頂いた山口研究室の学生や秘書の方々、そして年会の準備・運営を強力にサポート頂きました事務局の杉山さんに、深く感謝申し上げます。また、本年会の開催にあたり助成を頂きました公益財団法人加藤記念バイオサイエンス振興財団に厚く御礼申し上げます。



彌田先生



半田先生



ポスター会場風景



懇親会にて

(写真提供：甘利俊太郎さん)